

風
韻

第 7 号

(1957年度)

神 戸 大 学 風 韻 会



「熊野」 宇治正夫師範
昭和41年10月21日 於大槻能楽会館

風韻 第7号 目次

五十年の体験……………師範宇治正夫………… 1

先 輩 欄

- ・ リレー 随筆
 - 現役の方々へ……………旧5 西尾雄一… 3
 - 心にゆとりを……………旧23 和田慎三… 4
- ・ 凌霜謡曲会のお知らせ
 - 関西凌霜謡曲会……………幹事 井口宗敏… 5
 - 東京凌霜うたひ会……………幹事 高田透… 6
- ・ O・B(新9～12) 謡会だより…………… E12 大良晃彦… 7

「走馬燈」……………思い出の記…………… 9

伊藤智枝・尾島洋三・梶谷清勝・川上勝美
杉岡八千代・丹羽啓裕・古家清子
松村有芳・三宅晃・森本雅昭

▶ 昭和四十一年度風韻会活動総括

- 風韻会秋季発表会報告…………… E16 安藤幸雄… 21
- 学連コンクールを終えて…………… J15 尾島洋三… 21
- 41年度のあしあと…………… 23

▶ 昭和四十二年度風韻会の展望

- 新幹事紹介…………… 26
- 主要行事予定…………… 26
- 幹事長就任にあたって…………… E17 向浜幸雄… 27
- 神戸大学風韻会規約(案)…………… 28
- 編集後記…………… 31
- 付録…………… 神戸大学風韻会名簿

表紙題字は宇治師範筆



夏季強化合宿
昭41年8月25日 於 津山誕生寺



第15回卒業生・神戸大学風韻会秋季発表会
昭和41年11月12日 於 学生会館ホール

五十年の体験

(その三)

師 範 宇 治 正 夫

芸道に入る心構えの第一としては、無我夢中で前進のみを心掛ける事である。

見台の前へ座ると口癖のように、「なんぼしても上手になりませんので厭になります」と言う人がかなりある。

これは不満ではないのであろう、勿論質問の響きはない。愚痴であろうか。少しは謙遜の気持とも受取れるのでは

あるが、教える者の立場になると大変困る言葉である。何とか言わねば済まぬとは思うけれども、「その通り」と

も言えないし、「そんな事はありません、中々上達されました」と言うのも厭で、相手の陥し穴にはまり込んで心

にもない御世辞を言わされたような感じがする。

度々返事に困らされた私は、「誰でもそんな気がする時代があるものですが、その時こそ上達の兆しの見えた時

で、一層の努力をなさい」と言うのであるが、どうも斯んな発言をする人は熱がなく、二、三カ月もすると、また同じ質問とも愚癖ともつかぬ事を言われて、返事に困るのである。——私は「何の稽古事でも惣てある時期迄は一木橋を渡る様なもので、自分は只一筋の前に進む外、後ろを見ても横を見ても駄目ですよ」と言う。また二、三カ月して同じ事を言われると、「それではおやめなさい」と言いたくなってしまふ。

これとは反対に、「お蔭様で氣持良く謡える様になりました嬉しいです」と言われるところらも何とかして上達して貰いたいと、一層力を入れて指導する様になる。

初めから些細な事を言わぬ事も大成させる為に必要な事である。私の、教える人に対する望みは、例えて言えば天に冲する大木になってもらいたいのであって庭の植木にはないのである。また謡や仕舞がその人を大成させる為に何程か役に立たねばならぬと思う。その為にも教える者と習う者との心の一致こそ必要であろう。

(つづく)

先輩登場

(一) リレー随筆

現役の方々へ

旧制五回生

西尾雄一

謡曲を始めて三十数年。さっぱり未熟で進歩しない現状ですが、折角の編集部よりの指名ですから敢えて拙文を被露する次第です。以下小天狗のたわ言と思つて読み流して下さい。

近頃、謡曲会で拝聴して第一に感ぜられるとは、謡が非常に綺麗になつたことです。勿論、謡曲も音楽の一種ですから、綺麗に謡うことも必要ですが、力が欠けては謡の特色を失ってしまいます。能を鑑賞せられるとよく分りますが、舞台上の演者は申すに及ばず、地謡、囃子方の緊迫した演技、力と力のぶつかり合う氣迫が最後まで舞台と見所との雰囲気をつづけてゆくものです。

例えば、道成寺に於けるシテと小鼓方との力の對抗を御覧になれ

ばよく分ることと思います。勿論、役柄の喜怒哀楽、老小壮、男女、尊卑等によつて、謡い方の心持ちに相違がありますが、これは力を抜くとか、加減するとか言うことではなくて力を内に入れることだと思ひます。この力を優雅にも烈しくにも發揮するのが我々の勉強の問題です。先代の梅若万三郎師が「松風」を舞われる時でも、「安宅」と同様の力が入ると言われたと伝えられて居りますが、尤もなことだと思ひます。力がないと謡全体が浮いた調子になり、特に強吟では下音が下らず謡に重味がなくなります。此の場合、注意しなければならぬのはどのに力を入れないことです。非常に苦しい発声になります。

次に必要なのは、能の本筋を理解して謡って頂きたいということです。吾々素人が謡本を見乍ら謡っていると、謡が平面的になる場合が多い。曲の場面の變化によつて謡い方も変らねばならぬのは当然です。よく能を鑑賞して、能の場面、所作を考えて謡ってほしいものです。特に節のある箇所よりも言葉のところをよく研究してほしいと思ひます。

くだらぬことを色々書きましたが、要は若い間によく勉強して下さい。年と共に益々面白くなること請合です。

心にゆとりを

昭和二十八年卒(旧・二十三)

和田 慎 三

最初から私事に亘って恐縮ですが、私は今年の四月から、銀行の従業員組合の役員に推され、組合の業務に専従しています。組合の仕事は申すまでもなく、給与(定例給与、賞与、退職金等)の引き上げ、勤務時間の短縮、福利厚生面の充実を三つの柱として、常に働く条件の向上改善を考え、経営側に要求しているわけですが、仕事の内容は広汎且多岐にわたり、仲々止まるどころがありません。

しかも要求一つ作るにしても、考え方を異にする一万数千人の最大公約数を導き出して纏めて行く必要があります。かなり苦勞をしてそれを組成しても、今度は銀行との折衝が始まります。これもお互いにそれぞれの立場があるため、当然の事乍ら、簡単に通る訳でもありません。何度も折衝を重ね、揉んだ末、完徹する場合もあり、未達に終る場合もあります。未達の場合は、どうするかについて一人一人組合員の意向を聞いて回らねばなりません。仲々辛抱の要る仕事で、うまく行った時は遣り甲斐がありますが、難航するとやはりイライラし、どうしても心に余裕がなくなります。

この時私の心の砦となるのは「謡曲」です。困難な場面に遭遇すればする程、心の余裕をとり戻さねばなりません。通勤の途中、あ

るいは便所の中でも謡曲を思い出します。家へ帰ったり、休日には思い切って謡います。謡曲のもつ幽玄、華麗、品格の高い世界に入っていくと大ていのイライラは素飛んでしまう様に思います。心身ともに蘇生する気持になり、心がゆったりするところには、また良い企画、解決案が浮びます。

組合の仕事は一般の仕事の様に一つの指令、命令でどんどん進んで行くものでなく、納得づくで進めねばならない点で、時間と忍耐力が必要で、それだけに一層心にゆとりをもたせることが肝要です。その意味で私と謡とは切り離せない——好きな伴侶として今後と共に暮らすことでしょう。

そして私だけでなく、この競争の激しい中で忙がしい職場で働く組合員にも「心にゆとり」をもつ様に呼びかけています。組合の仕事も経済的な条件向上を要求するだけでなく、精神的な面でも血の通った、どんな事でも腹藏なく話しあうことが出来る明かい職場を築くための要求も益々必要になってくるのではないかと思っています。

(一) 凌霜謡曲会のお知らせ

関西凌霜謡曲会

井口 宗 敏

最初にこの会を開いたのは、昭和三十八年九月十日大阪順慶町の吉祥閣に於てである。それよりさき大井証券の石井源一氏が何かの会のとときに、一度凌霜人の謡曲会を開こうではないかと云うので、大いに賛意を表しておいたが同氏も其後積極的に動く気配もない儘立消えになって仕舞った。其後何かの機会に、神明倉庫の藤尾豊一氏にこの話をしたところ、是非実現せしめようということになって、同氏は「凌霜」誌上に同志を募られたところ、広島商科大学の田中載吉氏の如き遠々広島から駆せ参ずる旨の御手紙を頂戴し、其他伊藤則忠、青木又雄、豊島又衛の諸氏からも御参加の便りを頂いた。東京の高田透氏もわざわざ大阪の私の会社を御訪問下され、東京の凌霜謡会の御話を頂き私を激励に預った。又、日商の石原康志氏からも、青年凌霜人を引き連れ是非一役買いたいとの申し込みがあったが、残念なことには石原氏及びその一統は宝生流であり前記の最初の会合は観世、宝生両流共同で催したが、参加者の人数から見て両流を常に一堂に会して催すことは支障も多いので、第二回以後は両流の合作は取止めることとした。しかし時には両流合同の謡曲会もやりたいと思っている。

しかし私は最初の会合に於て青年凌霜人の熱と行動力に大いに教えられた所があり、我々の会には是非青年層のより多くの参加を求めなければならぬと思ひ、石原氏に適當な人の推薦を依頼し同氏は日商の上野氏を推してくれた。

上野氏は当初は主として日商の凌霜人を引具して参加してくれたが、何故か第五回以後その協力を得られなくなってしまったのはまことに遺憾に思っている、偶々風韻会の人私の会社を訪問され、色々風韻会の御話を聞き、むしろ現役の学生諸君の参加を願うに如かずと考えたわけです。従って私としては出来だけ風韻会の会合にも御邪魔かもしれないが顔を出したいと思っておりますから、風韻会の諸君も御遠慮なく私達の会合にも御出席下さい。唯御了承願って置きたいことは、我々は実業人として可なり時間に制限を受けることが多く、又職場が区々であるため御互いの連絡が早急に取り難いことです。いずれにしても凌霜人という風韻会という同根より生じた間柄です。お互いに遠慮なく謡曲に生きようではありませんか。

さて関西凌霜謡曲会は其後会場を色々と変えましたが、最近は何存知の通り若林与左エ門氏の御好意で六甲の松泉館でやって居ります。しかしもし大学当局で御許しを得られる様なら次回位に大学の学生会館を拝借してやりたいと思っております。

当初は年に四回位は集りたいと思っておりましたが、本年は第七回を一度催しただけです。之、全く私の怠慢によるもので誠に申し訳なく思っています。

しかしこの会合はいつ迄も続けたいと思っておりますから、風韻会の諸兄も御協力下さる様御願ひします。

東京凌うたひ会の概況

(大五卒)

高田 透

東京凌うたひ会の前身は「ヒマラヤうたひ会」であります。「ヒマラヤうたひ会」は昭和二四年、凌霜第六回の同好者間に誕生しました。第六回生のクラス会は「ヒマラヤ会」と称せられ、今日もお健在であります。石井光次郎氏、出光佐三氏、故椿本説三氏等の知名の諸先輩の輩出したクラスです。このクラスの謡曲同好者が「ヒマラヤうたひ会」を結成し、その中心となったのが故音申吉氏（日本機械計装会長）でした。音申吉氏は尺八も名手だったのですが、謡の方は故橋岡久太郎氏（観世流）門下で、素人ばなれのした謡曲家でした（氏の評伝は凌霜誌第一七六号及第一七七号に拙稿が載りました）。

ヒマラヤうたひ会は漸次他のクラスからも同好者が参加し、会員数も増加を見ましたので、昭和二十九年に「凌霜うたひ会」と改名して今日に至りました。会員数も一時は八十名を超す盛況を見たこともあります。毎月一回例会を催し、素謡五番、独吟仕舞等を出し例会の出席者は多い時で二十名内外、少ない時で十名内外でした。演了後は懇親会で、簡単な料理を取寄せ、その日の感想や批評を談笑裡に語り合います。この懇親会が実に楽しいもので、他の会では見られぬ雰囲気を持ち、知らず知らずの内に芸道の刺激や反省を与

えてくれます。

毎年二回位、箱根、熱海等の温泉地で会員の紹介をたよりに遠出の会を催します。これまた楽しい会であること申すまでもありません。

筆者は昭和三十一年来、会の幹事役を仰せ付かり今日に至りましたが、三十七年に会長音申吉氏を肺癌で失い、後任会長を白井経倫氏（大四卒、日本食品加工会長）に委嘱しました。

実をいうと、本会には宿命的な弱点があります。それは年を重ねるに連れて会自体が老化して来ることです。会員中には足腰が立たぬようになったり、耳が遠くなったり、その他の故障が原因で出席率が減って来ることで、これを補うためには壮年層の新会員を増さねばならないのですが、不幸にして壮年層の会員が得られませんが、現在の会員構成は年長者が明四十三年卒、若い（？）人でも昭和六年卒です。幸い今年、山家猛君（昭二十九、元関西凌霜謡会所属）が来て呉れて大いに新風を入れてくれます。

今年六月頃、風韻会の新刊誌を送って戴いたので、その会員名簿の中から東京在住の人を抜出し、約三十名の人に毎月案内状を出して見ましたが、これまた応答がありません。僅かに一、二名の方から欠席の返信が参りました。この点、貴会や関西凌霜謡会の盛況振りを羨ましく思っています。このような状況で、当会も今月で第三百三十回命脈を辛じて保って参りました。

△ 風韻会へお願ひ

東京凌霜うたひ会は前述のように老化現象に見舞われています

ので、何とかして若返り法を講じたいのが私の念願です。就いては貴会でも何か適当な機会がありましたら東京方面在住の会員に呼掛けていただきたいものです。（昭四十一、十一、二十三）

○ 編集部より

本稿をお寄せいただきました高田透氏は昨年十二月二十九日、急逝されました。ここにつつしんで哀悼の意をささげ御冥福をお祈りする次第であります。

(三) O・B 謡会だより

みんなと謡うつてのは

気持がいいなア

新九く十二回生謡会

(四十一、五、十五) だより

ことは昨年(四十一年)五月十五日ことだから、旧間に属するが、非常に楽しい会だったので御報告する次第。――

一度卒業生同志で集まって謡をうなってみないかとは、かねてから同窓のものから声があったところだが、原先輩(新九)はじめ、二、三の先輩にはかかってみたところ、「せひやってみる。参加者を

集めてやるから」と賛同を得た。言い出しへの十二回生が幹事役を仰せつかって、山本君と私とで急拠計画をたてたが、日時は五月十五日(日)二時半から謡会、五時からコンパ。会場はご存知「平和楼」と決定した。また、参加者はわれわれが一年の時の四年生までで、とりあえずやってみようということになり、各学年の幹事の方から同学年の方に連絡をとってもらった。

余談になるが今の現役諸君は一年から四年まで同じ場所ですびかつサークル活動をやっているからか、そんなところはないようだが、われわれの時の三、四年というのはコワイ人であり、オーバーに言えば近よりがたいところがあつた。それが、自分が上級生になり、卒業するにつれて、ひとときわ親しく感じられてくるから不思議である。

夜来の雨も昼ごろにはあがって、当日の電車の窓からは、六甲台の、あるいはそのバックの六甲山の緑がひととき美しく眺められた。九回生が一番乗り、なにしろ十時に阪急六甲に集合して、六甲山へ行ってこようとしていたのが、雨でオジャン。しかたなく、平和楼で待っていたというのだからオソレイリマシタ。とかくするうち別記の十一名が参集した。

各学年各一番の素謡(連吟)を中心に謡会がすすめられた。みな学生時代にかえて謡った。学生集会所や部室で宇治師範を前にして練習したときと同様に力を込めて、あるいは、コンクール大会のときのように気持を合わせて爽快な気分で謡った。もつとも、気分ばつかり盛りあがって、声の方が伴わず、みずからの口からもれた声にガクゼンとしたのも事実であるし、学生時代ほど、いうことを

きかなくなっている脚のために、退場時には四ツん這いという場面が見られたのも事実である。

急な計画であり、また、会場の関係もあって、関西の方にだけ連絡していたので、出席者は、先刻記したとおり十一名、地謡は連続稼動である。キリの部分には悲愴な声も交るとはいえ、なかなかもって気魄のこもった謡と自賛する次第。(…調子ニ乗ッテウヌボレルナト、イワンデタダサイ。)大いに楽しみつつ番組は進み、無本の鶴亀を時にトチリながらも無事終了した。

「久方ぶりに力一杯に声を出した。」「みんなと謡をうなるというのがこんなに気持がよいもんだとはねエ。」とは謡会を終了しての全員一致しての感想だった。

五時から、ピンフ楼のなつかしい味でコンパに移ったが、話はベトナム問題から、同窓だれかれの結婚はなしなど、硬軟さまざま。

来年もまたやろうやという声とともに七時半ごろ散会した。

当日の番組及び出席者はつきのとおり。

〔九回〕原・上野山・松岡・末広

〔十回〕山口(久)

〔十一回〕前田・安田

〔十二回〕大良・山本・有田・佐々木

番組

上野山

鞍馬天狗

(末) 松岡

原 (九回生)

屋島

有田 大良

山本 (十二回生)

安達原

(合同)

嵐山

山口久 (十回生)

吉野天人

前田 安田 (十一回生)

鶴亀

(全員)

(E12・大良晃彦記)

風韻会OB (新九〜十二回) 交歓謡会

昭和四十一年五月十五日(日) 二時半始
於 六甲平和楼

走

馬

燈

— 思い出の記 —

今年も風韻会は十名の会員を社会に送り出すことになりました。早くも四年の月日が過ぎ去ったのです。その思い出は走馬燈の影絵の如く彼等の胸の中を駆けめぐっていることでしょう。ここに走馬燈の名の下に、思い出の記を綴って戴きました。

雑 感

(P・15) 伊藤智枝

年が明けてはや十日間過ぎてしまった。年と共に新年に対する緊張感がうすれてゆくようである。むしろ肩をすばめて氷のような風を背にして歩く今頃から、二月、三月にかけてが師走であり、四月が新年のように思える。だが来年からは違ったものとして感じられることであろう。

今年はずっと総選挙を控え例年とは異った街の様子である。先ほどから立候補者の演説が、きこえてくる。フーンと思う。

黒い霧晴らす力だこの一票、という標語が新聞に載っている。これまたフーンと思う。

二、三日前、深田池に薄く氷がはっていた。ついこの間まで、トラノオの黄色が一面に揺れ動いていたのに。今日の深田池には、み

それが息を殺して水面に消えていった。いつかのもやの中の気だった池、水が飲みたいと、もがく池、坊や好きだけ魚をおとりと少年達と戯れる池、ボートの若人達に耳を傾ける池、桜の花びらと静かに空をながめる池、これらのいろいろな装いの深田池が、ポツリポツリと浮んでくる。まだまだ私の知らない深田池が、限りなくあるに違いない。明日はどうか。

赤塚山の冬は寒いであろう。六甲の冬も。寒い冬は、外へ出るのもなくとなく、いやなものであるが、その反面、何かをやり出そうとする時、心のひきしまるおもいがする。そんな時の状態がたまらなく好きである。

三月も眼前に迫る。風韻会、という名にやっと馴染んだのにと去りがたい気持でいっぱいということが今の私の心情である。話したいという気持のみで入部したものの、幾度か足が遠のきそうになった。その度に、「途中から入ってゆく事の方が、より勇気のいることだ。」とH氏の言葉を思い起こし、ヨチヨチと歩いて来た。歩いてきてよかったと思う。私にとって全て、最初であり最後

の経験という寂しさを、かくしきれない。先輩の方々、後輩の皆さんとのつながりにおいても、同じ思いである。

けれど教育学部の三、四年生の皆さんとは、調理室で共に練習などの関係上、想いの外である。

心残りの最大の二ツに、宇治先生の人徳を充分知ることのできないままに出てゆかねばならないということである。

寂しさとか心残りのようなことばかりになってしまいそう。でもそうばかりではありません。

謡って舞う、なんと美しいことだろう肉体的にも精神的にも。この美しさを、可能な限り否それ以上に、高める為に努力したいものである。最後に先生をはじめ皆様方に感謝すると共に、風韻会の発展を心から願うのである。

卒業にあたって

(J・15) 尾 島 洋 三

風韻会——それは僕の大学生活において最も大きな比重を占めた。精神的にも身体的にも——。風韻会は僕にとってかけがえのないものであった。もし、風韻会というものが神戸大学に存在しなかったとしたら僕の大学生活は全く別の様相を呈していたことであろう。はたして今頃はどうなっているであろうか。あるいは何もせずただぼんやりと卒業してゆくだけであつたかも知れない。あるいは

はひょっとして、法律を修めて司法生として社会に出ることになっていたかも知れない。

今、僕は一種のなりゆきのままに、しかしそれは自分の心のなりゆきでもあったが、風韻会の一員として卒業してゆこうとしている。風韻会での四年間の生活をふり返るとき、ある種の感慨を禁じえない。

ジュニア時代——今思っても姫路分校でのジュニア生活は、ほんとうにのんびりとした良き時代であつた。そこには大きな進歩こそなかったが、初心者としてほんとうに心から謡曲を楽しめた時代であつた。のどかな学園で、みんなと声をはりあげ、語り合い、遊び合うことは喜びであつた。しかし姫路だけで十二名もいた同輩が六甲に移ると共に次々とやめていった。誠に寂しい思いがしたものである。自分にも確固とした信念のなかつた当時の僕が、積極的に説得し引留めることのできなかつたためであつたが。

三年生時代——それはまさに時間的束縛とのたたかひの毎日であつた。自分がやらねば仕方ないと何となく思っていた僕はすすめられるまま、安易に幹事長の役目を引きうけてしまった。六甲台の同輩が少なかつたために仕事は多く、ゼミでも幹事をやらされ、アルバイト週四回、それに姫路からの通学（これは想像以上にしんどいものである）などが重なって最も苦しい時だつた。姫路分校での、のんびりした生活になじんでいた僕にはなおさらだつた。要領の悪い僕は自分自身の勉強も練習もできず、スランプ続きだつた。自分は趣味として謡曲を楽しむため風韻会に居るはずなのに、なぜこんなにしんどい目をしなければならぬのか、せつかく大学に来てま

で勉強を二の次にして、なぜこんなことをしなければならぬのかとほんとに悩んだ時もあった。しかし人から同情や憐みをこわれることのきらいな僕は、人に同情をこうのもイヤだつた。自分がひきうけてやったことには責任をもちたいと思つた。そして曲がりなりにも一年間の幹事長の職責を果し終えることができたのであつた。この時感じたことは、何の幹事でもそうあるが、幹事とは割の合わぬもので、何もしくなくてもいろんつまらないことにまで気をつかわなければならぬ。だからこそ、いっそう上級生も下級生もみんなが幹事に対して協力を惜しまぬようにしなければ、と思つたことである。幹事個人に対する好悪は別にして——。大学生のサークルであれば、それはいっそう大切なことではないだろうか。

四年になって——やっとならぬ謡を楽しんでやれるようになってきた。そしていうまでもなく、二度舞囃子の舞台を踏めたこと、コンクールのことなど、謡にも仕舞にもよい思い出ができたことを大変うれしく思っている。後々、大学時代を思い起す時、これらのことは決してぬきにされないであろう。

この間宇治先生には公私にわたつて大変お世話になつた。折にふれ御自身の体験よりにじみ出るお言葉は、それがありふれたものであればあるだけ、いっそう血の通つたものであり、先生の人間そのものであつた。楠町での練習の時、今日こそは先生に負けまいと、力いっぱい力んで謡つたものだつた。はじめのころは、うまく謡おう、先生に自分がかまく謡えるのを認めてもらおうなどという気があつて、そのために先生の前に座ると自分の気持が見通されたように、すくんでしまつてなかなか思う通り謡えなかつた。近頃、やっ

と先生の前でも平気で気持良く、力いっぱい謡えるようになってきたのに。これからという時に親しく御指導願える機会が少くなることは全く残念なことである。今年には風韻会創立五十年、神大風韻会も三十五周年を迎えるとのこと。一つの大学にこれほど長い間、ずっと一人の先生が続けて指導にあたられたということとはあまり聞いたことがない。この一事だけ見ても先生の目に見えぬ偉大さが分ると思ふのである。これからはますます御健康で、僕達、そして僕達の後輩のため、いつまでも厳しく御指導下されることを願うこと切である。

僕の風韻会生活——考えてみれば僕ほどに幸運だつたものはいないのかも知れない。姫路分校最後の学生たりえたこと、学舎統合成つた年幹事長という仕事をできたこと、よき先輩、同輩、後輩に囲まれ、かけがえのない友を得たこと、宇治先生、藤井先生という偉大な人格にまでふれることができたこと。仕舞、舞囃子を数多く経験できたこと、コンクールに入賞できたこと、などなど。考えてみればどれもこれももつと僕にとっては幸運なことであつた。単純によかつたよかつたということがほんとうによいことかどうかはわからないけれど、こういう気持で風韻会を卒業してゆけることを、今は素直によろこびたいと思う。この四年間の風韻会生活が僕の今後に何かを生み出し、力となることを期待して。

1967.1.24

風韻会と私

(P・15) 川上 勝美

大学生活も後わずかで終わる。解放された喜びと都会での生活あるいは大学での生活に多少の不安を抱きながら家を後にしたのが、ついこの間のように思われるのに。

三年間の風韻会活動で得たことは多い。その中でも特に三年生でこのことが強く残っている。

私が入部したのは二年生の六月頃だったと思う。その頃にはもう一年生の人達はサークルの生活に慣れ始めており、内弁慶な性格も手伝って新入生と一緒にサークルに解けてむことができなかった。したがって風韻会の一員であるという自覚もなく、消極的に練習している時が楽しいというぐらいで一年は過ぎた。

三年生になって幹事学年として私なりにサークル運営に協力していかうと、サークル活動に積極的に参加した。教育学部でも読書会や、一つのテーマでの観能会、能のふるさと巡り、研究会等もやり始め、毎日忙しかった。しかし、充実した楽しい毎日であった。合宿において練習はもちろん運営についてよく話し合った。今思えば些細なことを重要視して夜遅くまでよくやったものだと思う。しかし、当時は夢中でそれに打ち込んでいた。

その他活動していく中で、積極的に行動することの意義を私なりに会得し、またその満足感をも味えた。このことは私の大学生生活

の中で得た最大の喜びである。

謡は少しづつ知れば知る程奥深く味わい深いように思う。謡い方について三年間やってきたにしてはおそまつすぎる程知らない。しかし、謡うのは好きになった。細々とでも続けていきたい。最近囃子の笛の音を聞くと落ちつきたい気分になる。オヒャーラーリと聞えてくると必ず手が足がそれに合わせて動きだす。能は少ししか観ていないので、何もわからない。笛の音をきっかけにでもして楽しめる様になりたい。

思 い 出

(L・15) 杉岡 八千代

大学生活の主な場所であった風韻会での数多い思い出が次々となつかしく浮んで来る。

落ち着いた気分を味わいたいために、そしてダンスの底にねむっている姉の袴を利用しようとの動機づけもあって風韻会に入った。女性が少ない男性ばかりのうすすぎた部屋でとまどいながら練習し気づかれの多かった入部当時。男性に指導してもらい、声の高さがちがうことにも気がつかず、無理をしてキーキー声をはりあげた初めての練習。何事も珍しく楽しく、園遊会の、猩々、開店で忙しい目であったことも気持のよい思い出だし、特に摩耶天上寺での初めての合宿は最高に楽しかった。最近ほど練習時間は多くなかったよ

うであり、自由時間にはナポレオン、ブリッジと飽きもしないでトランプを続けた。マジシャン・パイを初めて手にしたのもこの合宿。練習のことははっきり思いつかないのに自由時間の楽しさだけはすぐによみがえってくる。一年生の時の土佐での春の合宿もなつかしい。ほかほかと暖かい日差しを浴びて田舎道をブラブラしたこと。桂浜の美しい海岸、夜遅くまで友と話し合ったこと。と、合宿ならではの思い出が数々浮んでくる。初めての能観賞、熊野、に魅

せられ、学連秋季大会でのコンクール結果発表に胸をときめかし、歓送会後のコンパの席上で先生、先輩方の人生経験豊かなお話に感動するなど、浮き浮きしている間に一年間は過ぎた。とにかく、ジュニア時代には暇さえあれば魔の階段を登りつめ部屋に通っていた。よく練習してもらい、小さな声もままたま大きくなり、お腹に力が入っていないとギューギューしほられ、謡曲の奥深さをしみじみ感じたのもジュニア時代。よく練習してもらったと思っていたものの、もっと積極的に欲を出し、先輩の方々から教わればよかったと後悔したのは、下級生を指導する立場になってからだった。

ただ教えてもらうだけでなく、一人で練習しようと思気込んだのもこの頃だった。合宿運営に当たり、予備合宿を三年生だけで行ったこと、合宿が始まれば毎晩遅くまで打ち合わせでくたくたになったことも、張り合いのある思い出となっている。三年生として合宿を経験したことで、同学年の和も増し、サークル意識も強くなった。三年生で忘れられないのは、なんといっても舞囃子、敦盛、をさせてもらったこと。舞囃子の練習で宇治先生から直接のご指導をうけたことは私に自信をつけさせてくれた。このことによって、仕舞にだ

けではなく、私の言動に自信を持てるようになったのは、なんととても嬉しい思い出である。卒論準備で忙しくなりほとんど練習に行けなくなっても、時間があれば練習に行こうという気持ちにさせてくれた時に風韻会は私の生活に入り込んでいると感じた最高学年だった。

甘える一年生から頼られる責任を感じる四年生へと各々異なった立場を経験し、考えさせてくれたこの風韻会。

お腹に力を入れることを教えてくれた風韻会。お腹に力を、といわれてもどういふことか全然見当もつかず、自分のものにならなくて困ったけれど、どうにかそれらしきものを会得したと思っっているこの頃。練習時だけに限らず、心の動揺する時に「お腹に力を」と自分自身に言い聞かすこともある。

謡曲って本当にいいもの。いくら練習しても奥深くてきわがなく大きな声を出すだけでも気分はスカッとなる。気持のめいっした時には部屋に行き、声を出してみるとなんともいえず、すがすがしくなることもよくあった。遠慮なく声を出せる場を持っていることで、謡曲を練習していることに喜びを感じ、誰もいない部屋で思う存分練習した後の格別の満足感を味わったものだ。

コンクールの練習の時のような厳しいご指導を宇治先生から一度うけたかったと残念に思っている。男子がコンクールの後で味わうスカッとした気分を、女子の連吟で味わえなかったのは、チョッピリ心残りである。

とにかく風韻会生活は楽しかった。もちろんつらいこともあったけれど、楽しいこと、意義あることの方が多かった、と、四年間を

振り返って見た時の感想として出て来る。

能、謡曲、仕舞に接して、心にゆとりが出来たと喜んでいると同時に、友との話し合いによって考えさせられることが多く、狭いわくにとじこもっていた入学当時の私を大きく成長させてくれた四年間の思い出多い風韻会の生活に感謝したい気持ち一杯だ。風韻会で得たことは、卒業後の新生活においても大きく私を支えてくれることでしょう。

宇治先生、諸先輩同輩の方々、本当にありがとうございました。後輩の方には余りお役にたてなくて申し訳ございませんでした。

風韻会での思い出

(P・15) 丹羽啓裕

風韻会にはいつて早や三年!! もう卒業しなければならぬ時期になりました。

僕達の学年のジュニアは姫路分校と御影分校とに別れていた最後の学年であった。その上僕達の学年の大半が姫路分校にいたため、部室へ行ってまきびしい感じがしたものだ。部室も今の自動車部の横のあのボロ屋敷であった。あのうす暗い部室で、先輩が朝から一人で練習している姿をよくお寺の住職さんが本堂でお経をあげているの思い出したものだ。(なんて風流な情景だろうと)、やがてシニアに進学!! ここで多くの同輩が風韻会を去って

た。そして十二月のコンクールが終ってから、第三号「こおもて」完成までこぎつけることができました。初めはいやいやながらの出席でしたが、だんだんおもしろくなってきて、第三号のときなど卒論をほっておいてまで出席したくらいでした。レポートする場合、色々調べなければなりませんから、少々苦痛な面もありましたけれども、それをもとに他の人と議論することによって一つのテーマに対して違った見方もあることがわかって本当に有意義なことだと思われた。もちろん、この為に練習がおろそかになるようでは何にもなりません、部員の大部分が参加する合宿などでも上記のようなゼミをやってみてはどうでしょうか!!夜の時間の一部(三十分間)を利用して結構いい線までいくと思います。(その為にはもちろん合宿までに決められたテーマについてレポートしなくてはなりません)五十人の場合なら十人一グループ位に行なったらうまく行くとします。以上風韻会生活をふり返ってみて、コンクール練習とゼミについてとくに印象に残ったので書いてみました。

卒業に際して

(L・15) 古家清子

三年生の九月、思いがけぬ父の交通事故のため休部同様のありさまとなり、皆さんに大変な御迷惑、御心配をおかけしましたこと、本当に申し訳なく思っています。事故当時、父につきっきりのため

いった。せつかくこれからいっしょにやっていけると思ったのに残念に思えたものだ。ところがその後僕にもシニアでの授業が忙しくなり、風韻会の諸行事と重なって一大ピンチとなった。しかし、それもなんとかもちこたえ、最高学年におけるコンクール練習にまでたどりつくことができた。コンクールの練習では「自分の声量の無さ」を思い知らされた。声を出すのが一杯で感情を表現する余裕などとてもなかった。やはり一、二年時代の声量をつくるための練習がいかに重要であるか、それとともに謡の奥深さというものを痛感させられた。あの印象多きコンクールのほかに、もう一つ風韻会生活で印象に残った事があります。それは教育学部での、昼休みを利用しての「ゼミ」です。最初は二年のシニアに進学後、ころろみとして「班女」について調べ、その能を鑑賞したり、世阿弥の「風姿花伝」を十回ぐらいいわけて輪読した程度で、あまり身につくまじりませんでした。次の年、今の三年の人が進学してきてから、又やろうという事になり、その上記録として残した方がいいのではないかという事になり、ゼミ誌発行の責任をひきうけて、第一号「こおもて」を作りあげました。この回は「小督」について調べ「小督」の観能、「小督」のふるさとめぐり、能面展見学、学生能「小督」のシテ古賀さん(宝生念)の感想etc内容が多く、比較的充実したように思われたが、ゼミ誌作りに時間がかかりすぎた。そこでもっと簡単にできる方法をというので第二号「こおもて」が三年の人が中心となって作られ、その中で「忠度」と「家元制度」について調べられた。第一号に時間がかかりすぎたことを反省して謄写印刷からコピーに切りかえ、ゼミの内容、ゼミ誌とも好評をほくしまし

学校のことも、家のことも、全くお留守になっていました。ようやく何とかしなければと気がついたものの、特に家の方は、清涼飲料水の販売という職業柄、車を運転して、得意先に品物を納めなくてはなりません。それまでは父一人が取りまわってやっていたものだから、私たち母娘は全く途方にくれてしまいました。そんなある日、風韻会の同輩の皆さんより救いの手がさしのべられたのです。あれから早や一年と三カ月余り、お蔭さまで私たち一家は、再び以前と変わらぬ生活を送ることができるようになりました。父も、三月の木の芽立ちの頃と、六月の梅雨期が、後遺症の出やすい時だからと、注意され、心配しておりましたが、無事にその時期も過ぎ、一安心しております。いまだ病院の方へは、顔面と肩の電気治療に通っておりますが、元気に働けるようになりました。本当にあの時、皆さんの御援助がなかったら、私たちはどうなっていたことでしょうか。今でも、事故の話を聞いたり、救急車のサイレンを聞くたびに、当時の様子がまざまざと昨日の出来事のように目の前に浮かんできます。同時に皆さんの暖かい御援助がうれしく、なつかしく思い出され、感謝の気持ち一杯になります。又、先輩、後輩の方たちからも励ましのお便りをいただき、どんなに勇気づけられたことか……。

私は、この事故によって、風韻会から、そして謡から遠ざからざるをえませんでした。殆んど練習にも出席せず、謡会にも顔を出さずか出さぬ、といった具合で、クラブの活動に参加しているとはいえない状態でした。でも、風韻会以外のものも目で、このクラブを見、謡をやらぬものの耳で謡を聞くという気持ちにはなりませんでし

た。もちろん当時は、父の生死という重大事の前に、全てのものが小さく感じられていました。

離れてみるとそのよさが一層よくわかるといわれますが、誦もその通りで、その中に頭を突っ込んで、氣違ひのように——少し語弊がありますが——なっていた頃は、氣のつかなかったよさが、離れてみてしみじみと感じられるように思います。そして、一生のよき友とするにふさわしいもの、という気がしているこの頃です。

四年間の風韻会生活は——四年間といえるかどうか疑問ですが——私にとって本当にいろいろな面で意義のあるものでした。そして父の事故による中断も、残念には思うけれど、反面、風韻会に対する私の思い、誦に対する私の関心を改めて確めることができ、ある意味で貴重な時期だったと思っています。そして何よりも私にとって貴重なことは、事故解決のいろいろな問題を通じて、人というもののもつすばらしさと、醜さを、たつぷりと、しかもそのかなりの両極端を経験したことでしよう。人の良い面も悪い面も、その人の氣づかぬ時に現われることが多いように思われます。そして人が己のことばかり考えている時ほど醜いものはありません。己を捨てた時、人は最も美しくなるし、その時こそ無限の力が与えられるのではないのでしょうか。私共人間にとって非常に大切なことなのに、忘れられがちのように思われてなりません。己を捨てることができなくとも、私たちは自分のことばかり考えるような人には絶対になりたくありません。これが私の一番強く感じたことであり、父の事故という大きな犠牲を投じて得られた最も貴重な収穫ともいえましょ

雑感

(E・15) 松村有芳

最後にもう一度、皆さんの物心両面よりの暖かい励ましと御援助を心から感謝します。事故の苦しい出をはるかに越えて心温まるすばらしい思い出として、いつまでも私の心に残ることでしよう。

×月×日

若葉の香をのせて吹いてくる風がとても爽やかな季節になった。授業がすむと、スリッパをバタつかせて生協ホール二階へ練習に行く。きょうは、都留先生のいらっしやる日だ。Mはまだ来ていないけれど、皆、車座になって練習を始めていた。僕もその中に入り込んで大声をほりあげているうちに、都留先生がいらっしやた。「大部、暑くなりましたね。私なんか、よけい暑くてね。」と、額の汗をふかれ、それから、オオム返しに練習が始まった。きょうは、六

月、本城能楽堂で行われる都留先生の謝恩会に出す「賀茂」の練習だ。一句づつ順繰りに誦うと、そのたびに、「そう、うまくできました。」と、おっしゃられ、うれしく思いながら練習を続けていった。その後の仕舞は、コソコソ皆のうしろからついていっていら、きょうの練習も終わった。この生協ホール二階での練習もあとわずかで終わってしまう。そして故郷の母にも思えた都留先生ともお別れして、六甲へ行かねばならないのだ。

×月×日

今回の合宿は、信州の山奥まで来ただけあって、とても涼しく、昨年の合宿のように上着を脱いで汗をタラタラ流して練習するという光景はみられない。午前中の練習では、一年生を教えることになった。所が、一人だけどうしても「下の中」が出来ない。何度やらしても「中」までおりてしまう。時々、「下の中」の音が出たから「その高さだ。もう一度やってみる。」と言うと、次は又、もともどってしまふ。しかし、何度も続けているうちにやつと、「下の中」の高さのみこめたらしく、一応安定して来た。「この高さを忘れず、何回も練習しろよ。」と言いながら、僕が一年の合宿の時「下の中」の音がどうしても出ず、休憩時間になっても足もくすきせてももらえないで練習させられ、やつと、「この高さを忘れるなよ。」と言われたことを思い出し、自分が今ふと口にした言葉が、その時の先輩の口調とあまりにも似ているのに我ながら驚き、又、先輩が一生懸命に何も知らない自分を指導して下さったことを深く感じさせられた。

×月×日

十一時から大槻能楽堂で能があった。宇治先生は「舟弁慶」を舞われた。「舟弁慶」は、高校時代に習っていたし、ラジオでも聞いていたが、能を見るのは初めてであった。先生の能を見ていると腹の底から出るあの声、又、力強い舞はとうてい、その年を感じさせない気魄がこもっており、見ていてこちらが圧倒されそうなおも思いた。僕が能というものを初めて見たのは、高校一年の時だと思ふ。広島県の厳島神社で行われていたものだが、言葉もはつきりとは聞きとれず、又、動きのゆるやかな実に退屈なものであったことを思い出す。しかしながら、今、風韻会に入り練習曲もふえ仕舞も自分で習って、又能を見る回数もふえてくるにつれて、少しは能もおもしろくなり、観能会の帰り道ずっとすり足で歩いたりする程になつてしまった。あの極限まで簡略化された舞台、それは観る人に無限の想像力を与えてくれ、演者、囃子方、地謡方の力と力がぶつかり合つて観る人をして時間と空間を超越せしめる能こそ日本人の心の故郷であり、それは演者、囃子方、地謡方そして観賞者の四者が一体となつてこそ達成される高度の芸術であると思われる。そして、自分は能の鼓や太鼓や笛の音を聞く時、不思議と心の安らぎを覚える。

×月×日

恒例の学連のコンクールがあった。三年生に尻をたたかれやつと、本腰を入れた練習でもあり、お世辞にも出来の方はよいとは言えないものであったけれど、コンクールにおいては、「あまり小さくまとまらぬよう、各自が地頭のもりでも誦いなきい。」との宇治先生の言葉を胸において、何くそといった気構えで体ごとぶつかつてい

おもいで

った。そして、謡い終わって皆「気持ちよく謡えたな。」と、唯、練習の成果を充分に出しえ、後顧の憂いなく謡えたことに満足しあった。しかし、予想外にも第二位というとても信じられぬような結果に終わった。入賞という素晴らしい副産物とはもあれ、コンクールという一つの目標に対して皆が力を合わせてぶつかることができたと同時に「精神一到、何事か成らざらん」のことわざのように、何くそというこの感慨こそ何事にあたってでも大切であることを充分に知らされた。何事においても、コンクールのようにな一つの目標を設けて力一杯努力するというこの努力の過程こそ、結果以上に意義あるものと思われる。

終わりに

いざ筆をはしらせてみると、あまりに断片的でまとまりのないものとなってしまったけれど、時には練習をサボったりしながらも、風韻会の一員として最後までとどまりえた意義は大きいと思われる。たゞ足大学の遺児も今年卒業することとなり、風韻会も、全学部サークルとしての変革期の基礎固めも次第に終わり、いよいよ大きく飛躍する時期となった。今日まで風韻会が歩んで来た道は、欠けてなまやさしいものではなかったけれど、その方向は間違っただけはなかったと思う。後輩諸君の一層の努力を期待したい。

末筆ながら、謡のむづかしさと良きをお教え頂いた宇治先生、藤井先生、母がわりにも思えた都留先生、先輩諸氏そしてあまりにもしてあげることの少なかつた後輩諸君に感謝の意を表し、拙文を終わりたいと思う。

入部

そもそも私が風韻会に入部するきっかけとなったのは、姫路時代の寮の先輩N氏のしつような誘いであった。今にして思えばよくぞ誘って下さったと感謝しておりますが、当時はその追求を逃れるために名前を記入したにすぎず、能を見たことも、ましてや謡曲をやるうなどは夢にも思っていなかった。運命のいたずらを感じる。

おだて

私がかがりなりに謡曲を続けるようになったのは、ひとえに昨春卒業された諸先輩と姫路の都留先生の巧みなおだてによるもので、一年の終り頃には謡曲をきわめたような気分になっていた。なにしろジュニア生しかない姫路風韻会はその技量も知れたもので(失礼!!)その上、都留先生は仏のようにやさしいおばさんだった。そんなわけで、当時はひまさえあれば生協の練習室へいそいそと通っていた。

寮

姫路白陵寮の一寮には十五回生の風韻会員が三人いた。そのうち一寮二室住人梶谷君は私の雀友で、私の入部させた唯一の人です。彼のなかなか出来なかつた紅葉狩の一節、誰れ白雲の八重葎、の中落しを得意になって教えたのを思い出す。寮では時、場所を問わず

ウナツたので一寮二階の連中は皆、紅葉狩の次第ぐらひは謡えた。

仕舞

私が仕舞を初めて舞ったのは六甲へ来てまもない二年の冬の納会においてでした。それも学生集会所の畳の上で学生服のまま舞ったもので仕舞といえるほどのものではなかったが、当人は必死でした。当日寝過ぎて、着いた時にはすでに私の出番はすんでいたが、特別のはからいで当時の四年生会員に地を謡っていたとき私一人で舞うことになった。曲は近藤先輩に教えていただいた、竜田のキリであったが、途中で扇を開くのを忘れていたのに気づきもう一度やり直したのを覚えている。姫路時代数多くの仕舞を習いながらやらんばらんにして何一つものにならなかつたのを悔んだ。

合宿

一年の夏、北海道へヒッチハイク旅行の途中、ヘンなことから崖から転落。おかげで足の骨にひびが入り合宿に行けなかつたのを除くと全て参加しましたが、私の場合、謡曲の練習もさることながら、演劇の演出家兼俳優としての合宿の要素も多分にありました。面白い合宿でした。

下駄

とうとう四年間下駄ですごした。素足の美の再認識などともっともな理由づけをしましたが、要はなまぐさな性格と靴づれをおそれである。社会人生活を控え、ネクタイとともに心配なものの一つである。

風韻会

我々を最後に今まで不思議に多かつた姫路分校出身者が風韻会か

ら姿を消す。今年になり風韻会規約もでき、ここ二、三年やかましかつたサークル論も一段落したようである。我々の入った頃に比べる風韻会も大きく変わった。そして今、風韻会は脱皮を終えようとしている。新しい風韻会は、今年あたりからはじまるように思われる。発展を祈る。

ありがとう
後輩のみなさんから見ると、ヘンな人。だったかも知れませんが、その、ヘンな人の相手になって下さった諸先輩、同輩、後輩のみなさんありがとう!!。又、能管の音を聞くと背筋がぞくぞくするまでに能への興味を開かせてくれた風韻会に深く感謝する。最後になりましたが宇治先生はじめ諸先生方ありがとうございました。

卒業にあたって

(T・15) 森 本 雅 昭

重苦しい受験生活からぬけ出し開放感を味わった入学当時、何か今までとは異った事をしようと思ひ自動車部と考えたが、幸か不幸か姫路にはその部はなかつた。ところがガイダンスで「吉野天人」の謡を聞いた時胸にジーンときて、これだノと思つて生協二階に行つた。十四回生諸氏にしばらくおかけで何とか謡えるようになる、もううれしくてしょうがない。練習後暗い時などは自転車を走らせながら得意になって謡ったものである。この頃は家が学校の近

くにあつた事、学業の方がそれほどいそがしくなかつた事などで、よく練習に行った。しかしこの頃より自分のサークルに対する考え方は安易なものであつた。分校当時の風韻会は幾分サロンの趣であり自分もこのふん開気が好きであり、サークルとはこんなものであると考えていた。

こういう姫路時代の甘いふん開気とはうってかわつてシニアでは、朝八時半から五時まですべて必須課目のそろつてゐる工学部の授業のため、我々のような通学者は朝五時半に起きて学校へ行かなくてはならない、こういう状況にあつて、サークルは土曜日以外は行けない。その結果、謡も一向にうまくならない。だんだん練習もいやになつてくる。こうなつてくると自分の生活から風韻会はだんだん遠のいて行くようになった。姫路時代、生協二階に行くのがたのしみであつたが、六甲では一人とり残された感じで、実際おもしろくなかつた。この頃より幾度となく風韻会をやめようかと考えるようになった。しかし今までやめずにやつてきたのは十五回生諸君をはじめとし、部員の皆様のおかげと感謝しております。

工学部の学生に言つておきたい事は、シニアに上がつてもやめないで続けて行く限りは、ひまを作り出して部屋に行くように心がけるべきである。サークルに入つてゐるかぎり、それに参加しなければ意味はない、これは自分の二の舞をさせたくないから言うのであるが……。

ここで自分にとってのコンパの効用をのべておこう。前にいったように学部関係練習にはほとんど行けない。しかし自分は風韻会が好きである。練習もしたい、皆と話もしたい。しかし練習は昼

である。ところがコンパは夜である。夜は自分にとって比較的自由な時間のもてる時である。そこでコンパにはほとんど参加させてもらった。この時は日頃のうつぶんをはらす絶好の機会であつた。今、卒業するにあつて、ああしてたら、こうしてたらと思うこととて一ばいであるが、中でも宇治先生のお話を聞く機会がほとんどなかつたことが非常に残念に思われてならない。

何か後悔めいたことばかりをかいてきたようであるが、風韻会から学びとつたものは多く、先生、先輩、同輩、後輩諸君に感謝しております。

(昭和四十一年度、風韻会活動総括)

秋季発表会報告

(E・16) 安藤 幸雄

第二回神戸大学風韻会秋季発表会は、十一月十二日(土) 開館間もない学生会館にて行つた。昨年の第一回秋季発表会は、顧問の柚木前学長の御逝去に弔意を表し、中止して追悼の謡会に変更しましたので、実際には本年が第一回の発表会ということになりました。

本年は学生会館というめづまれた新施設を利用し得たことにより観客動員数も増加し、さらに師範、教官、先輩の御参加の他、新しく関西凌霜謡会の大先輩、職員、大阪市立大学謡曲部の御参加をいただき、非常な盛会裡に終えることが出来ました。ここに皆様の御支援に対し深く感謝の意を表します。

秋季発表会は神大風韻会の一年の活動の総括であり、その為、できる限り多くの部員が舞台にて発表できるように配慮しましたが、本年は特に、一年生から四年生までの全員が、仕舞又は舞囃子を舞い、仕舞三十八番、舞囃子五番という驚くべき数になりました。練習には苦心しましたが、結果的にはクラブ全体の仕舞のレベルが向上し、大なる成果が得られました。

秋季発表会は神大風韻会の活動の成果発表の場であると同時に、師範、諸先生、先輩の皆様と現役部員が、謡曲という絆のもとに一

同に会する総会とも云うべきものであります。今後ともさらに多数の皆様のご参加、御協力を御願ひ致します。

次に主な番組を附記しておきます。(以下敬称略)

匠吟	清 巴	大阪市立大学謡曲部
舞囃子	船弁慶	浅 瑛子
	小袖曾我	小原絢子
	忠 度	高尾浩子
	春 栄	松村有芳
	仕舞 高 砂	戸田美代子
	素 謡 井 筒	多田恒夫(職員)
	独 吟 琴 段	シテ五十嵐勝三(新14) 伊藤欣二(旧13)
	素 謡 俊 寛	栗岡治作(関西凌霜謡会員)
	景 清	シテ藤井茂ワキ福光家慶ツレ伊藤欣二、同 楠田美樹(新14)
仕舞	班 女	シテ豊島又衛ワキ栗岡治作ツレ藤尾豊一 (以上関西凌霜謡会員)
		宇治正夫

第十二回学連コンクールを終えて

(J・15) 尾 島 洋 三

今年の学連コンクールは、十二月十日(土) 大阪能楽会館に於て

十四校参加のもと行なわれました。わが風韻会は昨年にひきついで「巴」。結果、第二位に入賞致しました。

正直言って、入賞など全く予期してもおりませんでしたので、発表の折は我が耳を疑ったほどで、それだけに嬉しさも又、格別でした。出場者全員同様の気持であつたろうと思います。連日熱心に御指導下さいました宇治先生はじめ、当日応援にかけつけて下さった都留好子先生ほか諸先輩の皆様、同輩、後輩の皆様、ほんとうにありがとうございました。

「巴」のキリはツヨ吟ヨワ吟の一体で非常に誦いづらく、難度も高いが、それ故にこそ我々の為には一番勉強になるとの宇治先生の大局的なお考えから、昨年にひきつづいての出演曲と決定したのは十月半ば。しかし試験やら神大風韻会秋季発表会、宇治風韻会などの行事が重なつたため、本格的な練習にとりくんだのはすでに十一月も末に近い頃でした。二週間余りの練習期間しかなく、三、四年生の混成チーム、コンクールには全員初出場ということ、要領もよくわからずイライラしたり、練習もはじめは足並みがそろわず、四年生はのんきすぎると三年諸君につきあげをくったりもしたほどでした。それに折からの風邪にほぼ全員がやられ、目前にひかえたコンクールを前に全員落着きを失つて、自分自身決して満足いく練習状態ではなかつたのですが……。しかし宇治先生の御叱正と励ましにより、当日はお教えのまま、神大の意気を示すべく、全員が一丸となりえたのでした。謡後の感じはまさに爽快の一語に尽き、これまでのいかなる練習にもまして気持ちよく、腹から誦いえたと言ひ合つたことでした。

コンクールには周知の如く種々の弊害があります。一例えば順位をつけることは不可能ではないか、技術度と理解度を分けて採点できるのか、曲の難易度は考慮されているのか、審査員の採点は公平なのか、などというところより生ずる弊害一にもかわらず、今日まで長く続いてきているのはその持つ積極面に、より大いなる意義が見出されているからに外ならないのであって、我々としても参加する以上は逃げ腰にならず、その積極面に目を向けるべきであろう。実際徐々にはあるが、その弊害も改善されつつあるし(例えば審査員の複数化、採点、批評の公表など)より一層の改善策が講じられる動きもあると聞く。順位は一応問題外としても、やはり専門家(評論家は別)の批評は聞くところがあり、当日の講評に於て我々の指摘されたウキ、下ゲに力がぬけ、浮きすぎ、下がりすぎが見られるとか、句止めに難あり、とかは一々もつともなこと、宇治先生にもよく直されたところなのである。

要は、出場者、のみならずクラブ員全員のコンクールにかける心の一致であり、それをふまえた各人の努力である。順位というものにはあくまで一つの結果にすぎないのだけれども、それにはさまざまな要素がからんでおり、単に技術のみならず、より以上に精神的な要素一無我、無欲、自然、一体、等一が作用するのであり、練達の専門家の目、耳はそれらをす早くとらえるのであろう。実際、舞台に出て二、三句謡う間にすでに勝負はついているのである。一それだけに裏返せば、各校技術的にそうレベルの差がないということでもあろうか。

第二位とは、まぐれ当り、とはいちがい言えぬにしても、ツイ

ていたというのが我々の本音である。ために問題も、苦勞も今後が一層大きいことであろう。全員一致、心を一つにして、宇治先生の教えを忠実に守り、神大風韻会の意気を示して欲しい。欲を出して順位に拘泥することはあくまで禁物である。

風韻会のあしあと

昭和四十一年度

三月

二日(水) 一八日(火) 春季強化合宿

於三重県志摩郡大王町波切

参加者三十八名、宿所の設備には多少不備な点もあったが、燈台のある岬の漁港のこの町はわりに暖かく練習の成果もあつた。とくに毎晩の夕食の刺身が好評だった。前田、大良、山本の諸先輩が参加され御指導いただいた。

練習曲「大江山」「小督」「熊野」「草子洗」「敦盛」「小袖曹我」「養老」「玉鬘」「船弁慶」「蟬丸」「巴」「葵上」「女郎花」「鉄輪」「頼政」「千手」以上16曲

於六甲台学生集会所

十四回生十二名を送る。宇治師範、藤井会長、荒川副会長、福光教授、井口大先輩、山本、戸次、武田、段野の諸先輩の出席、盛会

四月

二十九日(金) 学連月並会
於関西大学

参加者二十六名、学連での新人生の顔合せをする。
連吟「敦盛」シテ芥川、ワキ福山

三日(火) 旧三商大合同謡会
於大阪九華会館

舞囃子「船弁慶」(尾島)、素謡「忠度」(シテ岩崎、ワキ植田)
連吟「熊野」(シテ向浜) 合同素謡「小督」(ワキ円羽) 同「鶴亀」(ワキ吉留) 仕舞「網ノ段」(川上) 「富士太鼓」(杉岡) 「天鼓」(古家) 「高砂」(円羽) 「芦刈」(森本) 「笠ノ段」(三宅) 「蟬丸」(松村)

於大槻能楽堂

有志十七名参加、素謡「賀茂」ほか。
十六日(月) 大学祭文総デソークル発表

於六甲台講堂

素謡「忠度」(シテ高橋、ワキ野田) 仕舞「鶴亀」(高木) 「屋島」(吉井) 「草子洗小町」(安藤) 「杜若」(植田) 「小督」(小

久保「敦盛」(岩崎)「芦刈」(上野)「羽衣」(藤本)「小袖
曾我」(吉田、内海)「高砂」(浅)「清経」(戸田)玉鬘(小原)
「綱ノ段」(高尾)
二十九日(日) 大学祭園遊会「狸々」開店
於六甲台学舎前庭
今年は雨にたられ、一週間延期されたのだったが、当日もまた
また小雨降って、あわただしく開店した。今年は串かつの他に、綿
菓子も販売する。

六月

三日(金)―五日(日) ジュニア合宿

於摩耶山天上寺王蔵院

新入生十名が今年も風韻会に入部したのであるが、早く風韻生活
に慣れる為にジュニア生だけで合宿を行なった。

十二日(日) 学連春季大会

於湊川神社能舞台

連吟「大江山」(シテ清見、ワキ辻、一人武者中川)、仕舞「高
砂」(内海)「清経」(藤本)「杜若」(岩崎)「小袖曾我」(小
久保、高木)「吉野天人」(福山)「田村」(吉留)「草子洗小町」
(芥川)「芦刈」(沼田)
同日 関西凌霜謡会

於松泉館

連吟「巴」(シテ吉井) 仕舞「高砂」(尾島)「清経」(三宅)

「杜若」(植田) 学連春季大会と重なった為午前中のみ参加させて
いただく。
十九日(日) 四大学交歓会

於須磨幽仙閣

素謡「吉野天人」(シテ沼田、ワキ福山) 連吟「葵上」(内海
上野) 仕舞「杜若」(吉田)「羽衣」(安藤)「桜川」(吉井)「芦
刈」(上野)「鞍馬天狗」(植田)「鶴亀」(湯朝)「草子洗小町」
(高橋)「田村」(辻)「紅葉狩」(清見)「屋島」(向浜)「高
砂」(中川)

二十九日(水) 学生会館開館記念祝言

鶴亀(シテ安藤) 立派な学生会館ができた。

七月

三日(日) ジュニア祭サークル発表

於学生会館ホール

素謡「土蜘蛛」(シテ小川、ワキ菊地、頼光今宿、胡蝶北本、ト
モ中島) 仕舞「鶴亀」(梅村)「田村」(坂東)「熊野」(酒井)
「羽衣」(西村)「紅葉狩」(鹿川)
十日(日)―十二日(火) 文化総部リーダートレーニング

於姫路雪彦山

参加者、岩崎勝至(B16)、中川慎吾(T17)、向浜幸雄(E17)
の3名

八月

二十五日(木)―九月一日(木) 夏季強化合宿

於岡山県津山誕生寺

参加者四十五名、前田、佐々木、戸次、五十嵐、大林、楠田諸先
輩の御参加をいただき、大いにシボられる。謡曲、仕舞は全体的に
かなりのレベルアップがあった。

練習曲、「鞍馬天狗」「蟬丸」「三井寺」「安達原」「草子洗」
「放下僧」「屋島」「玉鬘」「天鼓」「小袖曾我」「船弁慶」「大
江山」「鶴亀」「紅葉狩」「羽衣」「田村」「富士太鼓」「竹生鳥」
「熊野」「頼政」以上二十曲

十月

十六日(日)―十八日(水) 三、四年男子強化合宿

於六甲台部室、摩耶山天上寺

目前の秋季大会の舞囃子の地、仕舞、コンクール用の練習を行な
う。

十一月

二日(水) 教育学部赤塚山祭サークル発表

於教育学部講堂

連吟「草子洗小町」(シテ沼田) 仕舞「高砂」(吉田)「玉鬘」
(伊藤)「清経」(内海)「綱ノ段」(川上)「笹ノ段」(円羽)

五日(土) 大阪市立大学賛助出演

於大槻能楽堂

仕舞「清経」(小久保)「松虫」(安藤)「綱ノ段」(内海)「天
鼓」(藤本)「竹生鳥」(高木)「田村」(吉田)「嵐山」(岩崎)
「笠ノ段」(吉井)「花月」(植田)
十二日(土) 神戸大学風韻会秋季発表会

於学生会館ホール

藤井会長、福光教授、栗岡、豊島、藤尾の大先輩、伊藤、五十嵐
楠田、長谷川、砂見の諸先輩の参加をいただき、非常な盛会であっ
た。別記参照

十三日(日) 文総運動会

於教養部グラウンド

参加者十八名、小雨の降る中、参加者全員よく頑張ってチーム優
勝する。終了後優勝カップでビールを飲む。

二十日(日) 宇治風韻会秋季大会

於湊川神社能舞台

素謡「竹生鳥」(シテ植田、ワキ高木、ツレ岩崎) その他

十二月

十日(土) 学連秋季大会、附連吟コンクール

於大阪能楽会館

連吟「賀茂」(シテ吉留ワキ芥川ツレ伊藤) 仕舞「高砂」(辻)
「敦盛」(清見)「羽衣」(野田)「草子洗小町」(湯朝)「芦刈」

〔中川〕「小袖曾我」〔高橋、向浜〕コンクール「巴」第二位入賞、前田、大良、山本、松尾、五十嵐、三明、岩本の諸先輩が応援に来て下さる。別記参照
十八日(日) 謡納会並四十一年度反省会
於教養部休養室

なお本年度の師範練習曲は次の通り

「忠度」「阿漕」「井筒」「芦刈」「融」「松虫」「狸々」「国栖」「鶴亀」「橋弁慶」「土蜘蛛」「吉野天人」「羽衣」「紅葉狩」「賀茂」「敦盛」の十六曲

〔昭和四十二年風韻会の展望〕

○新幹事紹介

十五回生を歓送すると、すぐ又、次の新入生を迎えます。四十二年の風韻会の幹事は次の通り決定しております。彼らを中心として運営される四十二年の風韻会を皆様方の暖かい御支援によりましてますます充実したよりよきものとなります様、念願致しております。

- | | |
|--------|--------------|
| 幹事長 | 向浜 幸雄 (E 17) |
| 副幹事長 | 湯浅 憲之 (E 17) |
| 会計委員 | 中川 慎吾 (T 17) |
| 学連委員 | 清見 嘉朝 (J 17) |
| | 辻 皓一 (B 17) |
| 文総委員 | 野田 和則 (B 17) |
| | 高橋 雅晴 (B 17) |
| 教育学部支部 | |
| チーフ | 芥川美和子 (P 17) |
| 副チーフ | 福山 和子 (P 17) |
| 会計 | 沼田 真弓 (P 17) |
| サークル連 | 吉留 敦子 (P 17) |
- 主要行事予定
四月 新入生歓迎会
学連月並会

- 五月 三大学(旧三商大)合同謡会(於・一橋大学)
宇治風韻会(五十周年記念会)
大学祭
文化サークル発表会
園遊会、模擬店「狸々」開店

四大学交歓謡会(神大、神商大、甲南大、神薬大)

六月 関西学生能楽連盟春季大会

七月 ジュニア祭発表会

八月 夏季強化合宿

十一月 神戸大学風韻会定期発表会(三十五周年記念会)

宇治風韻会(五十周年記念会)

十二月 関西学生能楽連盟秋季大会(於・大槻能楽堂)

附・連吟コンクール

三月 春委強化合宿

だいたい以上のような予定になっております。詳しくはその都度なるべくお知らせ致したいと存じますが、その節は何卒お繰合せの上御参加願えれば幸いです。現役会員一同、心よりお待ちしております。

○幹事長就任にあたって

(E・17) 向浜 幸雄

いやいや入った風韻会での生活も二年の歳月が流れ、今、幹事長という大役を引受ける羽目になりました。なのに、のんびり屋の私は、まだはつきりした活動方針も固めていません。

年度が改まり、風韻会の構成員が変更する度に、大学のサークルとしての風韻会のあり方が問題とされます。人間関係、それも大事でしょう。しかし、風韻会の特異性、即ち、風韻会を風韻会たらしめるものは、あくまで謡・仕舞であると考えます。それ故、人間関係を無視するのではありませんが、風韻会の第一目標は謡・仕舞の技術的向上にあると考え、厳しい練習を励行したいと思えます。

それから、サークルというものは、ひとり幹事長だけの、あるいは幹事学年だけのサークルではないのですから、全会員が一体となった、そして、民主的な活動に心掛けるつもりです。その意味で、出来る限り多くの、内容ある総会や幹事会を開き、計画性のある運営を行ないたいと思えますので、会員の皆さんも積極的な態度で風韻会の諸活動に参加して下さい。そうすることによって、はじめて、各自満足のおく風韻会となるでしょう。

非力な者ですが、風韻会の発展のために頑張りたいと思えます。諸先輩の御指導と、同輩並びに後輩諸君の御協力を御願います。

神戸大学風韻会規約案

神戸大学風韻会もますます大世帯になり発展の途をたどってまいりました。前々から、規約が必要なのではないかとこの声も出ておりましたところ、文化総部よりの要請もあり、急に具体化したしました。まだ現在のところは案の形でありませんが一応このままの形で掲載いたします。お気づきの点は御叱正賜われれば幸いと存じます。なおこの規約は従来の神戸大学風韻会のうち、現役学生のみを適用対象とするものであります。

神戸大学風韻会規約委員会

神戸大学風韻会規約(案)

第一章 総 則

(名称)

第一条 本会は神戸大学風韻会と称する。

(所在地)

第二条 本会は本部を兵庫県神戸市灘区六甲台町神戸大学内に置く。

(支部)

第二条ノ二 幹事長が必要と認めるときは総会の承認を得て、学部または教養部に支部を置くことができる。

(目的)

第三条 本会は能芸術の追求に努めるとともに会員相互の研鑽を行い、親睦を図り、また能芸術の振興に寄与することを目的とする。

(事業)

第四条 本会は前条の目的を達成するために日常的な活動の外に次の事業を行う。
一、毎年一回の定期発表会
二、機関誌等の刊行物の発行
三、その他前条の目的を達成するために必要な事業

第二章 組 織

第一節 会 員

(構成)

第五条 本会は神戸大学生をもってこれを構成する。

(会員の権利義務)

第六条 委員は本会の活動に参加する権利を有し義務を負う。

2 会員は所定の会費を納入しなければならない。

(顧問)

第七条 本会に総会の承認を得て顧問を置くものとする。

2 顧問は幹事会の諮問に答え、または本会の運営について意見を述べるることができる。

第二節 総 会

(総会の権限)

第八条

総会は次の事項について決議する。

- 一、本会の活動計画に関する事項
- 二、予算及び決算に関する事項
- 三、規約の改廃に関する事項
- 四、幹事の選任及び解任に関する事項
- 五、その他本会の運営に関する重要

(総会の招集)

第九条 幹事長は少くとも半年に一回総会を招集しなければならない。

2 幹事長は次の場合総会を招集しなければならない。

- 一、全会員の三分の一の請求のあるとき。
- 二、幹事会が必要と認めるとき。
- 3 幹事長が必要と認めるときは総会を招集することができる。

(定足数及び議決)

第十条 総会は全会員の過半数の出席により成立し、その議決は出席会員の過半数の賛成を得なければならない。

(議長)

第十一条 総会の議長は幹事長が指名する幹事がこれに当たる。

- 2 議長は書記を指名し総会の議事録を作らなければならない。

(オブザーバー)

第十二条 幹事会が必要と認めるときは総会に会員以外の者を出席させることができる。

第三節 幹 事 会

(幹事会の権限)

第十三条 本会の運営は幹事会がこれを決する。

(幹 事)

第十四条 幹事は総会においてこれを選任する。

2 幹事は正当な理由なくしては解任されない。

3 幹事の任期は一年とし再任を妨げない。

(役員)

第十五条 幹事会は互選により次の役員を選任する。

- 一、幹事長
- 二、副幹事長
- 三、会計
- 四、その他幹事会が必要と認める役員

(幹事長)

第十六条 幹事長は本会を代表し、本会の業務を総括する。

2 幹事長は次の場合幹事会を招集しその議長となる。

- 一、幹事の請求のあるとき
- 二、その他幹事長が必要と認めるとき

(副幹事長)

第十七条 副幹事長は幹事長を補佐し、幹事長に事故あるときはその職務を代行する。

(会計)

第十八条 会計は本会の会計事務を処理する。

(議 決)

第十九条 幹事会は全幹事の過半数の出席により成立し、その議決は出席した幹事の三分の二以上の賛成を得なければならない。

第三章 入部、休部、退部、除籍

(入部)

第二十條 本会に入部しようとする者は、幹事長に願ひ出てその許可を得なければならない。

2 入部を許可された者は所定の入会金を納入しなければならぬ。

(休部)

第二十一條 一ヶ月以上活動を休止しようとする者は、少くとも一週間前に理由を添えて幹事長に願ひ出て、その許可を得なければならない。ただし、緊急の場合はこの限りでない。

2 前項の休部期間は六ヶ月以内とする。ただし特別の理由を認められるときは、さらに六ヶ月以内の休部を許可することができる。

(退部)

第二十二條 本会を退部しようとする者は、少くとも一週間前に理由を添えて幹事長に届出なければならない。

(除籍)

第二十三條 総会は、次の場合には当該会員を四分の三以上の決議を経て除籍することができる。ただし、幹事長はあ

はじめ当該会員に弁明の機会を与えなければならない。

一、正当な理由なくして三ヶ月以上活動を停止したとき。

二、本会の諸活動を著しく阻害するとき、前項の規定によるほか、会員は本会の会員たる資格を奪われない。

(再入部)

第二十四條 退部者の再入部は、これを妨げない。

第四章

(経費)

第二十五條 本会の経費は育友会費、国費、会費その他をもってこれに充てる。

(会費)

第二十六條 会費及び入会金の額は別にこれを定める。

第二十六條ノ二 既納の会費はこれを返還しない。

第二十六條ノ三 休部期間中の会費は、これを免除する。

(改正)

第二十七條 本規約の改正は幹事会が決議し、総会において全会員の四分の三の賛成を得なければならない。

附則

本規約は昭和四十二年四月一日から施行する。

以上

編集後記

編集委員

尾島 洋三
松村 有芳
三宅 晃
安藤 幸雄

◇ここに「風韻」第七号をお届けいたします。世にラッキーセブンとか申します。本号にもこの意味で何らかの特色をもたせんとしましたが御覧の如くに落着いてしまいました。当初はもつと先輩方の原稿をと思っておりましたが実現できませんでした。編集子の努力不足をお詫び致しますと共に次号への先輩各位の御協力をお願い致します。

◇本年は風韻会創立五十周年と時を同じくして神戸大学風韻会の三十五周年の年でもあります。期が新たまると同時に気を新に、今後ますますこの風韻会が発展を重ねます様、先輩各位の御叱正、御助力をお待ち申し上げます。

◇本誌が創刊号巻頭言「……現役会員、卒業生会員の連絡を一段と密にし、以って風韻会今一層の発展を期そう」という初志を貫徹できる力を今後共与えられんことを望むこと切であります。

◇本号は経費節減の理由で会員名簿は別冊付録の形といたしましたことをお断り致します。なお従来先輩消息欄は御解答の回収率悪く、不掲載のやむなきに至りましたことをお詫びいたします。

◇最後になりましたが「風韻」第七号発行に際しまして種々御支援を賜りました皆様方に心より御礼申し上げます。(尾島)